

「情緒的・道具的甘え尺度」の構成の試み

小林, 美緒
九州大学大学院人間環境学府

加藤, 和生
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/18420>

出版情報：九州大学心理学研究. 10, pp.81-92, 2009-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

「情緒的・道具的甘え尺度」の構成の試み¹⁾

小林 美緒 九州大学大学院人間環境学府
加藤 和生 九州大学大学院人間環境学研究院

A development of “emotional and practical *amae* scale”

Mio Kobayashi (*Graduate School of Human Environment Studies, Kyushu University*)

Kato Kazuo (*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

Kobayashi & Kato (2007) explored to construct an *amae* scale, treating “*amae*” as being constituted of “emotional *amae*” and “practical *amae*”. They conducted a questionnaire study for college students, and obtained the results which highly suggest that *amae* is distinguishable between the proposed constructs. However, to have the high reliability and validity, the scale needs more items, including various aspects of each construct, and validity checks. Based on the pilot study, we constructed emotional and practical *amae* items, in a comprehensive way. In study 1, we conducted a questionnaire study with new *amae* items, targeted for 221 college students. Factor analysis demonstrated the factorial validity, indicating two expected factors, each consists of two sub-factors. The reliability and criterion-related validity were also verified. In study 2, to examine frequencies of each *amae* behavior to each particular *amae* object (romantic partner or close friend), we conducted the same questionnaire to 363 college students, specifying a particular object for each behavior. The results suggested that students most frequently engaged with “the emotional *amae* behavior for physical contacts,” regardless of the target. Also, students were indicated less frequently engaged with “the practical *amae* behavior for material helping.” Furthermore, their *amae* behaviors were more frequently engaged toward romantic partner than close friend. Particularly, male students engaged with *amae* behavior for physical contacts less frequently toward close friend. The results support an adequate reliability and validity of emotional and practical *amae* scale.

Key Words: emotional *amae*, practical *amae*, scale construction, *amae* behavior, adolescence

土居 (1971) による「甘え」²⁾ が日本人の心性を捉えるために重要な概念であるという指摘以来、理論家による「甘え」についてのいくつかの議論が行われている(竹友, 1988; Kumagai & Kumagai, 1986; 木村, 1972 など)。しかし、理論的レベルでは議論されてきた一方で、「甘え」を数量化されたデータに基づき実証的な検討を行おうとする試みは、「甘え」の定義の曖昧さなどがあったために、十分に行われてこなかった(小林・加藤, 2007)。

しかし、そもそも、「甘え」を測定するためには、どのような視点から考える必要があるのであろうか。これを考える上で、Kato (1995) が提出している甘え交流を1つのプロセスとして捉えた「甘えのプロセス・モデル」が参考になるだろう。まず、ある状況(甘え状況)において「甘え欲求」が喚起されることで、このプロセスはスタートする。この甘え欲求を充足させるために、次に、過去の甘え経験の中で形成された「甘えの内的作業モデル(IWMAI)」、「甘え態度」、そして「甘えの予期」などに基づき、どのように甘えたらいいのか、今が甘えてもいい状況かどうかなど色々な側面について判断を行う。その判断結果に基づき、甘えられそうな場合に実際に「甘え行動」が生起する。また、甘える前、甘えている間、甘えた後の各段階で、ポジティブ(例: 嬉しい、心地良い)またはネガティブ(例: すまない、すねる)といった「甘え感情」を人は体験する。つまり、「甘え」には少なくとも以下の4つの側面が含まれているといえるだろう。すなわち、実際の行動を起こす前にどのくらい甘えたい気持ちを持つかという「甘え欲求」、その人が持っている「甘え」に関する信念や知識の集まり

¹⁾ 本論文は、日本心理学会第71回大会(2007年, 大会発表論文集, 217)・第72回大会(2008年, 大会発表論文集, 99)で発表したデータに再分析を行ったものである。質問紙の作成・データ収集・整理に協力してくれた郷原杏子氏に、また調査にご協力いただいた多くの回答者に心より感謝いたします。

本論文に関する問い合わせは以下まで: kobamio@fka.att.ne.jp
²⁾ 本研究では、小林・加藤(2007)と同様に、「甘え」の特定の側面(例えば、甘え欲求、甘え行動など)を指していない場合には、意図的に「甘え」と表記することにする。「情緒的甘え」と「道具的甘え」についても同様である。これは、従来の論述や研究論文では「甘え」という言葉が具体的にどの側面や現象を指して用いているのかを明らかにされないまま議論されてきたという問題点を考慮したためである(Kato, 1995/2005)。

であるIWMAIや「甘え態度」、実際にどういうことで(甘えの内容)、どのくらい、どのようにして甘えるのかという「甘え行動」、甘えプロセスで体験される「甘え関連感情」である。「甘え」をより包括的に理解していくためには、研究者の問題意識に応じて、これらの諸側面のいずれかを特定化し測定していくことが必要である。

加藤(1998)は、上述のとの関連で、甘え行動を、「そもそも何を求めて甘えているのか」といった甘え行動の目的(「甘え行動の種類」)により2つに分けることを提案している。すなわち、加藤は、「甘え」に関する素朴概念の質的分析(Kato, 1995/2005)から、「目的甘え」と「道具的(あるいは依存的)甘え」の2種類の甘え行動があると主張している。目的甘え行動とは、相手との情緒的な交流によって親密感を味わったりリラックスしたりすることを求めるための甘え行動である。すなわち、甘える個人にとって、甘えること自体が目的となる「甘え」である。それに対して、道具的(あるいは依存的)甘え行動とは、前面的には実際に相手に何かをしてもらったり与えもらったりすることであり、それによって甘え欲求が満たされるあるいは満たしてもらえよう甘え行動である。すなわち、この甘え行動では、甘え行動をすることで間接的に甘え欲求を満たしている(詳細は、小林・加藤, 2007)。

では、「甘え」に関する既存の数少ない実証的研究の中で、「甘え」はどのようなものとして捉えられ、検討されてきたのだろうか。「甘え」の数量的な測定を試みた研究の中で、藤原ら(1981)の研究がよく知られている。藤原らは、様々な動詞の中から「甘える」と関連のある言葉を取り出すことで、「甘え表出尺度」を作成した。この尺度は、最終的に「甘え」の気持ちを10項目で表し、この合計得点をその人の「甘え表出」の強さとして示すものである(ただし、藤原ら自身は「甘え表出」の意味を明確に定義していない)。教示では、「悩みを抱えて苦しんだり、問題が生じて困ったりしている時、周りの人に対してどのような感情を持ちますか」と述べ、項目の表現も全て「～したい」「～して欲しい」としていることから、この尺度は、ある困った状況において「甘えたい気持ち」をどのくらい相手に対して持つかという「甘え欲求」を測定したものと推定される。彼らは、この「甘え表出」尺度に基づき、大学生はどのような状況で・誰に対して最も強く「甘え」を示すのかについて検討を行った。その結果、大学生は親に対してよりも、恋人や友人に対して「甘え」の気持ちをより強く持つことが示唆されている。そして、この甘え表出尺度は、その後の実証的研究の多くで、「甘え」を測定するものとしてそのまま用いられている(大迫ら, 1994; 外山ら, 1991など)。

しかし、これらの甘え表出尺度を用いた研究では、先述した「そもそも何を求めて甘えているのか」という甘え行動の目的による「甘えの種類」については、問題にされてこなかった。このような問題意識から、小林ら(2007)は、「目的甘え」と「道具甘え」の2つの「甘え」を区別した新しい尺度が必要であると考えた。なお、尺度の作成に際して、彼女らは、目的甘え行動の中心的要素は「甘え行動を通して情緒的にじゃれあったり構ってもらったりすることを楽しむこと」であると考え、「目的甘え」を「情緒甘え」と捉え直した。その上で、「情緒甘え」と「道具甘え」の2種類の「甘え」を測定する尺度を探索的に作成した。

小林らは、この尺度を用いて、大学生がある甘え状況で感じる各甘え対象への甘え欲求の強さについて検討を行った。そして、この甘え欲求が強ければ強いほど、人はより甘え行動を生じやすいと考えた。具体的には、次の2点に焦点をあてて検討を行った。すなわち、情緒甘え欲求と道具甘え欲求とは、ある特定の状況で、どの甘え対象にどちらがより強く見られるのか、甘えの個人差の表れ方はこの2種類の「甘え」によって異なるのか、であった。

大学生に対して質問紙調査を実施した結果、「情緒甘え」と「道具甘え」に含まれる項目は、それぞれ内的整合性で十分に高い信頼性係数を示していた。また、実際に2つの甘え欲求では、甘え対象への欲求の強さの表れ方が異なっていることが明らかになった。具体的には、大学生は、他の甘え対象よりも母親に対して情緒的な甘え欲求を相対的に高く「表出する」ことが示された。この結果は、「大学生は、家族よりも恋人や友人に甘えたいと思っている」とした藤原らの研究結果とは異なるものである。このことから、2つの「甘え」を区別した尺度を用いることで、これまでの既存の尺度では見過ごされてきた「甘え」の側面を捉えられる可能性が示唆された。

だが、小林・加藤(2007)の研究で用いた情緒的・道具甘え尺度は探索的に作成されたものであり、項目作成の手順や尺度の妥当性に関連して、いくつか不十分な点が残されていた。具体的には、以下の3点である。

第1の点は、項目の問題である。具体的には、項目数が少なく、また項目の選択は恣意的といえるものであった。そうすることとなった理由は、まず、5対象への情緒甘え欲求と道具甘え欲求について3条件で繰り返し評定を求めるものであったため、被験者の回答上の負担を軽減する必要から、項目数を各甘えで最低限(5項目)に抑える必要があったためだ。したがって、項目選択については、藤原らの「甘え表出」尺度の10項目の中から、その甘え状況や甘え対象に最も適切だと思われるものを5項目取り出すという方法を用いた。そのため、

この5項目だけでは、実際には様々なやり方で行われるだろう情緒的・道具的甘え行動を包括的に捉えきれない可能性がある。また、3条件のそれぞれで選択された5項目が異なっていたために、これらの尺度得点を条件間で比較できなくしてしまった。

第2の点は、因子的妥当性の問題である。小林ら(2007)らでは、この2つの「甘え」が、因子分析によって別々の因子として得られるかについては未検討であった。すなわち、実際に大学生の「甘え」がこのような因子構造を持つかについて、因子分析的手法による検討を行う必要があるだろう。

第3の点は、基準関連妥当性についてである。尺度構成の手続きにおいては、新しく作成した尺度と既存の関連尺度との相関関係を検討するなどによって、基準関連妥当性を確認しておくことが必要である。しかし、前回の研究ではこのような基準関連妥当性についてまで検討できていない。

そこで、本研究では、以上の点をふまえ、2つの調査を行った。研究1では、新たな道具的・情緒的甘え行動尺度を作成した。具体的には、次の3つについて検討を行った。すなわち、情緒的・道具的甘え行動をより包括的に捉えられるように項目を作成すること、2つの「甘え」の因子的妥当性を確認すること、基準関連妥当性の検討を行うことであった。研究2では、その尺度構成を受け、この尺度の有効性を検証する。すなわち、具体的な甘え対象を設定した場合に、それぞれの対象との関係性に応じて異なるだろうと予想される情緒的甘え行動や道具的甘え行動の出方が、実際に確認できるかどうかを検討する。

研究 1

目的は、以下の3つであった。すなわち、予備調査に基づく情緒的・道具的甘え行動尺度の作成、因子的妥当性の検討、甘え表出尺度との相関による基準関連妥当性の検討、であった。

方 法

回答者

大学生 221名 (男性 92名, 女性 129名; 19~24歳, $M=20.3$ 歳; $SD=.93$) であった。

調査時期と調査方法

2006年12月に大学での授業時間内に実施した。所要時間は15分程度であった。

質問紙

1. 情緒的・道具的甘え行動尺度甘え対象

項目の生成 項目をより包括的に生成するために、大学生に対して調査を実施した ($n=36$; 男性 5名, 女性 31名; 20~245歳, $M=20.9$ 歳; $SD=1.18$)。この調査は、以下の教示に基づき行った。

「あなたは日頃、人に甘えたいと思ったり、甘えていと感じたりすることはありますか。しかし、甘えには2種類、『道具的甘え』と『情緒的甘え』とがあると考えられています。」

次に、それぞれの「甘え」の具体的な例を示した。

「道具的甘え」:「何か困ったことがあった時に物を貸りたり役に立つ情報を教えてもらったり、道具的なサポートをしてもらうこと」

「情緒的甘え」:「悩みを聞いてもらったり人恋しい気持ちになった時にべたべたしたり、情緒的なサポートをしてもらうこと」。

最後に、回答者自身は、2つの甘え行動にどのようなものがあると思うかについて、自由に(最大で10個)記述するように求めた。

その結果、情緒的甘え行動では合計146個(個人の回答数は0~10個, 平均回答数3.95個, $SD=2.81$)、道具的甘え行動では合計136個(個人の回答数は0~10個, 平均回答数3.68, $SD=2.57$)の具体的な甘え行動の記述文が得られた。更に、これらの記述文に加えて、理論的に情緒的・道具的甘え行動であると想定される甘え行動の記述文も作成した。次に、大学教員1名, 大学院生3名により、これらの記述文の内容が2つの甘え行動を表すものとして本当に妥当であるかどうかについて、内容的妥当性の検討を行った。最終的に、情緒的甘え行動では25項目、道具的甘え行動では16項目が作成された。

尺度の教示 回答は、これらの項目について、次の教示のもとに7件尺度(「1:全くしない」~「7:非常によくする」)で評定することが求められた。

「人はいろいろな人に様々な形ややり方で甘えます。その中には、いい甘えもあるし、困った甘えもあります。あなたは普段、次のような甘えをどのくらいしていますか。」

2. 基準関連妥当性の検討のための関連尺度

情緒的・道具的甘え行動尺度の基準関連妥当性を確認するために、「甘え表出尺度」を用いた(藤原・黒川, 1981)。この尺度は、悩んだり困ったりしている状況を具体的に提示し、その状況で各甘え対象にどのくらい「甘え」の気持ちを強く持つかについて、「甘え」の気持ちを表す10項目で回答を求めるものである。だが、本研究では、この尺度を用いる際、藤原らの手続きとは異なり、甘え状況と甘え対象を具体的に特定せず、一般的

な甘え行動について聞くという形式に修正した。それ以外の点では、藤原らと同一の教示と手続きを用いた(用いた評定尺度は5件法で、「1:そうは感じない~5:そう感じる」であった)。

結果と考察

1. 情緒的・道具的甘え行動尺度の信頼性と妥当性の検討 1-1 情緒的・道具的甘え行動項目の因子分析結果

はじめに、情緒的甘え25項目、道具的甘え14項目の合計34項目について因子分析(重み付けのない最小二乗法・プロマックス法)を行った³⁾。ここで、情緒的甘えと道具的甘えとは互いに概念的に関連し、ある程度相関することが予想されるので、斜交回転(プロマックス法)を用いた。その結果、スクリープロットに基づき、5因子を採用した。

ただし、5因子解のうちの1因子については、本研究では除外した⁴⁾。その理由は、この因子に含まれていた5項目が、大学生が日常的に行うものとして一般的ではない可能性があると判断したためである。というのは、本研究は、日常的で一般的な大学生の甘え行動を捉えることを意図していたためである。

これら5項目を除外した後に、再度、因子分析を行った。その結果、因子内の整合性を下げたり、2つ以上の因子に同程度に因子負荷(.40以上)していたりした情緒的甘え行動に関連する5項目を除外した⁵⁾。これらの項目を除外した因子分析の結果、3つの観点(固有値の推移、解釈可能性、因子負荷)から4因子解がより妥当であると判断した。そこで、今度は4因子解に設定し、再度、因子分析を行った。その結果、因子負荷量が低かったため(.30以下)、さらに次の1項目を除外した:道具的甘え項目の「お金が足りないときに、ちゃっかりと相手にすぐに借りる」。

³⁾ なお、作成された道具的甘え行動は16項目であるが、甘え対象を「親や先生」と指定していた2項目については、甘え対象を「恋人または親友」と指定している研究2では使用できないため、本研究では除外した(削除項目: 困ると、親や先生など年上の人に、代わりにしてもらおう; 自分のお金はあっても、親にねだって、出してもらおう)。

⁴⁾ 削除した項目は、全て情緒的甘え行動に関連する項目であった。内容は、用もないのに電話をかけ、なかなか自分から切ろうとしない; 特に理由がないのに、一緒に居ようとする; 特に用もないのに、会いたがる; つい、相手の都合も考えず、おしゃべりをして話し込んでいる; 困ったり悩んだりしている時は、すぐ「聞いて、聞いて」といった感じで、相手に話して聞かせる、であった。

⁵⁾ 削除した項目は、以下のものである: 相手に「こら、だめだつて」といわせるようなことをして遊ぶ、相手の体で遊ぶ(つについて「痛い」と言わせてみたり、こそばして「こら」と言わせてたりする)、相手に膝まくらをしてもらったり、わざと相手の膝の上に足を乗せたりする、甘えて、ほったや顔を相手にくっつける、だっこをしてもらいたがる。

以上の手続きを経て最終的に得られた因子分析の結果がTable 1である。はじめに、これらの因子の命名を行った。各因子の項目の内容を解釈した結果から、第1因子は「子どもっぽく振る舞う情緒的甘え(情1)」(全10項目)、第2因子は「自分でやるべきことを代わりにしてもらって道具的甘え(道1)」(全10項目)、第3因子は「べたべたと身体的な接触を求める情緒的甘え(情2)」(全5項目)、第4因子は「(お金や物などの)物質的な援助を求める道具的甘え(道2)」(全3項目)と命名した。なお、以降では、それぞれの因子を「情1、情2、道1、道2」と略す。ここで、内的整合性を検討したところ、全ての因子で高い信頼性が示されていた($\alpha = .760 \sim .922$)。

なお念のため、因子間の相関関係を検討した。その結果、情緒的甘えに関連する因子間(情1 情2)では $r = .574$ に、また道具的甘えに関する因子間(道1 道2)では $r = .632$ と高い相関が見られた。これに対して、異なった甘えに関連する因子間では、一部を除くと、それほど高い相関はみられなかった(情1 道2で $r = .539$ であった以外は、 $r = .269 \sim r = .494$)。

これらの結果から、因子構造において「情緒的甘え」と「道具的甘え」は別の因子とみなすことができるといえよう。また、予想したように、この2側面は、完全に独立するものではないことがわかる。したがって、以上の因子分析の結果から、「『情緒的甘え』と『道具的甘え』は別の因子として存在している」という想定が、統計的にも確認されたといえるだろう。また、小林ら(2007)では、2つの「甘え」に大別されることが示されていたが、本研究の因子分析によって、2つの甘え行動はさらに2つの要素により構成されていると考えられる。

1-2 基準関連妥当性の検討

基準関連妥当性を検討するために、本尺度と甘え表出尺度との相関分析を行った(Table 2)。その結果、本尺度のすべての下位因子との間に有意な正の相関関係が見られた($r = .48 \sim .64$)。このことから、本尺度は「甘え」を測定するものと考えられ、本尺度の基準関連妥当性が確認されたといえよう。

なお、藤原らの甘え表出尺度は、本尺度での情緒的甘え行動よりも道具的甘え行動との相関値が高く($r = .49$ と $.64$)、情緒的甘え行動とは中程度の相関($r = .48$ と $.50$)にとどまっていた。つまり、甘え表出尺度は、「道具的甘え」を相対的により反映した尺度であり、必ずしも「情緒的甘え」を十分に捉えられていないといえるかもしれない。

そこでこの点をさらに明らかにするために、藤原らの10項目⁶⁾のうち、情緒的甘え項目だと考えられる3項目(すがりたい、言わなくてもわかって欲しい、慰めら

Table 1
研究 1 における因子分析結果 (全体)

因子名	項目	因子				
		1	2	3	4	
1 情 1 子どもっぽく振る舞う甘え	11 相手の前で子どもっぽくそぶりをしてみせる。	.852	-.082	.056	-.020	
	12 相手に話すとき、いつの間にか子どもっぽく話し方で話している。	.812	-.084	-.004	.039	
	14 子どものような (不器用な) 失敗をさせて、相手に「もうだめだねえ」と言わせながら構ってもらおう。	.743	.078	-.218	-.013	
	9 ちょっとつらいことがあると、すぐ相手のところについて駄々っ子のように泣いたり駄々をこねたりする。	.741	.024	.048	-.016	
	10 どこまで相手が自分を甘えさせてくれるか、わざとわがママを言ってみせる。	.740	.025	.007	.053	
	5 わざと子どもっぽく振る舞って、相手の関心を引こうとする。	.737	-.030	.106	-.061	
	15 「……ちゃん、かわいいね」と言わせるような振る舞いをわざとする。	.735	-.101	-.047	.064	
	7 たいしたことでないのに、「あ～ん」と泣きそうな声を出して、相手に「かわいそうだね」「よしよし」などと言ってもらおうとする。	.733	.043	.010	.045	
	13 気に入らないことがあると、すぐにすねたりして、ふてくされてみせる。	.694	.008	.072	-.081	
	8 わざとふてくされた態度をとって、相手の気を引こうとする。	.634	-.024	.168	-.072	
2 道 1 代わりにしてもら甘え	26 用事や仕事があるときには、相手をあてにして、してもらおう。	.084	.871	-.050	-.156	
	25 自分でやるのが難しそうなことは、自分であまり努力もしないで、すぐに代わってもらおう。	-.027	.832	-.085	-.011	
	23 自分でやるべき用事を、相手にしてもらおう。	.046	.819	-.136	-.085	
	21 分からないことがあったら、自分で調べないで、すぐに相手に教えてもらおう。	-.287	.758	.142	.034	
	20 自分でしなくてはいけないことを、すぐに手伝ってもらおう。	-.005	.756	.083	.002	
	22 自分で出来る身のまわりのことを、代わりにしてもらおう。	.008	.746	-.109	.114	
	24 自分が苦手なことを理由に泣きついて、相手にしてもらおう。	.178	.596	.017	.008	
	19 分からないときや困ったときには、すぐに相手に意見やアドバイスをもらおうとする。	-.197	.498	.289	.027	
3 情 2 べたべたと身体的な接触を求める甘え	27 困ると相手の助けを当てにして、してもらおう。	.310	.473	.011	.162	
	28 甘えて、何かをしてもらおう。	.278	.348	.104	.146	
	2 相手のそばにいつもくっついてる。	-.051	.056	.882	-.042	
	1 相手に抱きついたりべたべたしたりする。	-.050	-.039	.881	.044	
	3 「くすぐりっこ」などをして、相手とじゃれあう。	.105	-.001	.635	-.008	
4 道 2 物質的援助を求める甘え	4 ちょっかいをかけて相手の気を引こうとする。	.210	-.032	.520	-.049	
	8 相手に甘える。	.308	.022	.502	.039	
	17 自分がほしいものを、相手を当てにして買ってもらおう。	-.023	.005	-.054	.842	
	16 相手が持っている物をねだる。	-.017	.004	.069	.681	
	18 お金がもらえそうだと「ねえ、ちょうだい」といってせがむ。	.033	.008	-.036	.669	
		$\alpha =$.922	.907	.862	.760

注：各項目についている番号は、尺度を実施する際の項目順を表す。

全説明分散 = 56.39%

6) 「甘え表出」尺度の項目内容は、「あてにしたい、たのみにしたい、すがりたい、まかせたい、相談したい、甘えたい、なんとかして欲しい、言わなくてもわかって欲しい、慰められたい、後押しをして欲しい」の 10 項目である。合計したものが「甘え表出」得点となる。

れたい)、道具的甘え項目と考えられる残り 6 項目をそれぞれ合成し、この 2 つの平均得点との相関関係についても分析を行った。その結果、甘え表出尺度の道具的甘え関連項目の合成得点は、「道 1：代わりにしてもら甘え」と特に高い相関を示していた ($r=.61$)。また、

Table 2
研究1：因子間および他の尺度との相関係数

	情2：べたべたと身体的な接触を求める甘え	道1：代わりにしてもらおう甘え	道2：物質的援助を求める甘え	甘え行動表出尺度
情1：子どもっぽく振る舞う甘え	.621**	.498**	.437**	.501**
情緒的・道具的甘え行動尺度		.342**	.256**	.480**
道1：代わりにしてもらおう甘え			.574**	.637**
道2：物質的援助を求める甘え				.487**

$n=215-218$

「道2：物質的な援助を求める甘え」とも中程度の相関が見られた ($r=.44$)。その一方で、情緒的甘え行動の2因子との相関は比較的低かった(情1で $r=.31$, 情2で $r=.35$)。したがって、藤原らの甘え表出尺度は、代わりにしてもらおうような道具的甘え行動を中心に構成されている尺度であると推測される。ただ、甘え表出尺度の情緒的甘え関連項目の合成得点は、情緒的甘え行動の2因子と(情1： $r=.49$, 情2： $r=.47$)、道具的甘え行動の2因子と(道1： $r=.51$, 情2： $r=.43$)で、共に中程度の相関を示していた。すなわち、甘え表出尺度の情緒的甘え関連項目と情緒的甘え行動因子との間には、ある程度高い相関があることが認められたものの、その一方で、道具的甘え行動因子とも同程度の相関が見られた。

ここで改めて藤原らの甘え表出尺度の項目を見てみると、この尺度には、身体的な接触を求める「情緒的甘え」に関する項目が全く含まれていないことが指摘できる。このことが、甘え表出尺度での情緒的甘え関連項目が、情緒的甘え行動と道具的甘え行動の各因子の両方と中程度の相関を示していたことの原因になっているのかもしれない。しかし、特に母子間や恋人同士の「甘え」のやりとりにおいて見られやすい、いわゆる「べたべた・いちゃいちゃ」といった身体的な触れ合いは、「甘え」の中心的な要素の一つであると考えられ、そうであるならばそれに関連する項目を含めていくことが重要となる。したがって、この意味で、今回作成した尺度は、甘え表出尺度が捉えきれていない「甘え」の側面を捉えているという意味で、今後の研究に何らかの貢献ができるものと期待できよう。

ただし、相関分析の結果から、情緒的・道具的甘え行動の2因子ともに、甘え表出尺度との間にある程度の相関関係があることが示されている。その意味で、今後さらに、これら2つの尺度の共通点とそれぞれの独自性を詳細に検討して行く必要がある。

以上の結果1-1と1-2から、本研究で作成された情緒的・道具的甘え行動尺度は、十分な妥当性(因子的妥当性、基準関連妥当性)と信頼性(因子の内的整合性)を備えた尺度であることが確認された。ただし、本研究では、基準関連妥当性の検討は甘え表出尺度との関連のみで行われたため、他の関連尺度を用いた妥当性の確認が必要であろう。また、信頼性についても、再テスト法などの他の手法を用いて検討される必要があるだろう。

2. 因子・性別での得点差

4つの下位因子で因子に含まれる項目の合計得点を項目数で割り、算出した平均得点(Table 3)について、2(性)×4(因子)の分散分析を行った。性は被験者間変数で、因子は被験者内変数であった。その結果、性の主効果は有意ではなかったが($F_{(1,214)}=.84, p=.36$)、因子の主効果が有意となった($F_{(2,36,505.9)}=74.08, p<.001$)。有意になった因子の主効果について下位検定⁷⁾を行った。その結果、「情2：べたべたと身体的な接触を求める甘え($M=3.24$)」が他の3因子のいずれよりも有意に高かった(全てで $p<.001$)。また、「道1：代わりにしてもらおう道具的甘え($M=2.51$)」は、「情1：子どもっぽく振る舞う甘え」と「道2：物質的な援助を求める道具的甘え」よりも有意に高い得点を示していた(共に $p<.001$)。だが、「情1：子どもっぽく振る舞う甘え($M=2.11$)」と「道2：物質的な援助を求める甘え($M=2.04$)」の間では差が見られなかった。

次に、性×因子の交互作用が有意になった($F_{(2,36,505.9)}=3.86, p<.05$)。この有意な交互作用は、Fig.1から分かるように、「情1：子どもっぽく振る舞う情緒的甘え」の因子で、女性($M=2.32$)の方が男性($M=1.90$)よりも高く($p<.05$)、他の3因子では性差がないことによる。すなわち、女性は、男性よりも子どもっぽく振る舞うような仕方でも情緒的により甘えているといえよう。しかし、その他の甘え行動には、男女で差はない。

以上の結果をまとめると、次のようになる。主効果の

⁷⁾ 研究1・2で行った多重比較の下位検定は、全て Bonferroni法を用いた。

Table 3
研究1・研究2における甘え行動尺度の下位因子平均得点

		研究1					
		全体 (n=218)		男性 (n=82)		女性 (n=135)	
		M	SD	M	SD	M	SD
	情1：子どもっぽく振る舞う甘え	2.16	(1.17)	1.92	(.96)	2.32	(1.26)
	情2：べたべたと身体的な接触を求める甘え	3.28	(1.45)	3.17	(1.54)	3.36	(1.39)
	道1：代わりにしてもらおう甘え	2.50	(1.11)	2.55	(1.10)	2.48	(1.12)
	道2：物質的援助を求める甘え	2.03	(1.17)	2.09	(1.09)	1.99	(1.21)
		研究2					
		全体 (n=106)		男性 (n=13)		女性 (n=92)	
		M	SD	M	SD	M	SD
恋人群	情1：子どもっぽく振る舞う甘え	2.71	(1.14)	2.88	(1.02)	2.69	(1.17)
	情2：べたべたと身体的な接触を求める甘え	4.41	(1.47)	4.88	(1.27)	4.35	(1.50)
	道1：代わりにしてもらおう甘え	2.24	(1.14)	2.74	(1.23)	2.15	(1.10)
	道2：物質的援助を求める甘え	1.80	(.91)	1.79	(.98)	1.80	(.92)
		全体 (n=256)		男性 (n=26)		女性 (n=230)	
		M	SD	M	SD	M	SD
親友群	情1：子どもっぽく振る舞う甘え	1.64	(.84)	1.40	(.69)	1.67	(.85)
	情2：べたべたと身体的な接触を求める甘え	2.54	(1.24)	1.91	(1.05)	2.61	(1.25)
	道1：代わりにしてもらおう甘え	2.15	(1.18)	1.72	(.84)	2.20	(1.20)
	道2：物質的援助を求める甘え	1.46	(.85)	1.49	(1.25)	1.46	(.80)
合計人数		(n=362)		(n=39)		(n=322)	

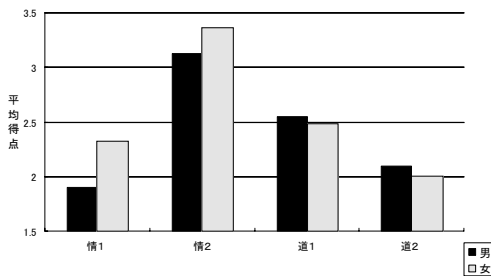


Fig.1 男女による各因子における平均得点 (研究1)

分析結果に基づくならば、大学生は、他者とのべたべたとした身体的な接触によって情緒的な甘え行動を最も行っている。本来なら自分ですべきことを代わりにしてもらおうような道具的な甘え行動も比較的行われやすい。それに対して、お金や物をねだるといった甘え行動は、大学生ではあまり見られない。

この結果は、これまでの甘え研究がおそらく暗黙に前提していた予想に反するものであると言えよう。ここでいう暗黙の前提とは、「大学生の『甘え』は、金銭的な援助や、対人葛藤によるネガティブな感情を低減するためにするものだ」というものだ。このように考える根拠

は、これまでの甘え研究では、「甘え」の起こる状況として、「苦しんだり困ったりしているとき (藤原ら, 1981)」、「金銭的に困っているとき (外山ら, 1991)」、「対人関係で葛藤が生じているとき (大迫ら, 1994)」を設定し、その状況で「甘え」の気持ちなどがどれだけ生じるかを測定してきたためだ。そのため、本研究で得られた結果と異なっていた可能性がある。本研究では、大学生は「相手にべたべたして構ってもらおう」甘え行動を最もよく行っていることが示された。このような甘え行動は、不安や葛藤などの状態よりも、むしろリラックスできる安心した雰囲気の中で生じるものだと考えられる。つまり、これまでに取り上げられてきた金銭的困窮状況や対人葛藤状況だけでは、大学生が実は頻繁に行っている情緒的甘えの側面は、十分に捉えきれていない可能性があるだろう。したがって、大学生が日常的に行っている「甘え」をより包括的に捉えるためには、心地良く、リラックスした状況で行われる情緒的甘え行動についても、より焦点をあてて取り入れていく必要があるだろう。

交互作用の結果からは、次のことが言えよう。大学生の男性は、女性に比べて、子どもっぽく振る舞う情緒的甘え行動をそれほどしない。だが、他の甘え行動では、男性でも女性と同じくらい甘え行動を行う。この点に関

して、甘え表出尺度を用いた従来の研究では、一貫して女性の方が男性よりも「甘え」を強く表出していた(藤原ら, 1981; 外山ら, 1991; 大迫ら, 1994)。だが、本研究では、子どもっぽく振る舞う情緒的甘え因子でしかこの性差は見られなかった。残りの3因子では、むしろ男女差はないことが示されていた。ただし、現段階では、この違いが何によって生じるのかを推察することは難しい。この男女差の現れ方の原因については、今後、更なる検討が必要だろう。

研究 2

研究1では、大学生が日頃行う情緒的・道具的甘え行動の因子構造が明らかになった。では、これらの側面(因子)において、甘え対象との関係性による違いはどのように見られるのだろうか。研究2では、特定の甘え対象を想定して回答させ、研究1で示された情緒的・道具的甘え行動の得点のパターンに対して、どのような得点のパターンが得られるかについて検討を行った。なお、甘えやすい対象として恋人または親友を選んだ。

特に、研究1では、これまでの甘え研究の見解とは異なる2点が示されていた。つまり、大学生は、身体的な接触を求める情緒的甘え行動を最も行っている、ほとんどの因子で(子どもっぽく振る舞う情緒的甘え行動以外で)性差は見られない、の2点である。甘え対象を特定した場合に、この2点がどのように変わるのかについて検討を行った。

小林ら(2007)では、大学生は、恋人や親友に対して、道具的な甘え欲求よりも情緒的な甘え欲求をより強く持っていることが示されている。また、情緒的甘え欲求は親友と恋人との間で有意差は見られなかったが、道具的甘え欲求の強さでは、親友の方が恋人よりも高くなっていた。だが、本研究で新しく「情緒的甘え」に加えられた要素として、「いちゃいちゃする」「べたべたする」といった「相手との身体的な接触を楽しむ情緒的甘え」がある。この新しく追加された情緒的甘え行動項目のために、本研究では、小林ら(2007)の結果とは異なる結果が得られると予想された。具体的には、このような身体的な接触を求める甘え行動は、一般に恋人に対しては行いやすいが、親友に対しては、大学生はそれほど行わないと考えられる。したがって、身体的な接触を行う情緒的甘え行動では、むしろ恋人の方が親友よりも得点が高くなると予想される。これに対し、甘えて何かを代わりにやってもらったり、ちょっとした頼みを聞いてもらったりすることは、小林ら(2007)の結果と一致して、気軽に頼みやすい親友に対して生じやすいと予想される。

方 法

回答者

回答者数は363名(男性40名, 女性323名; 18~41歳, $M=18.6$ 歳; $SD=1.82$)であった。

調査時期と調査方法

2007年7月と2008年8月に、大学での授業時間内に質問紙を配布し、同時間内または1週間後に回収を行った。所要時間は20分程度であった。

質問紙

1. 情緒的・道具的甘え行動尺度

研究1で作成したものをを用いた。ただし、研究2では、特定の対象に対する甘え行動頻度を問うように修正を加えた。これまでも、甘え対象として、母親、父親、恋人、親友、友人について甘え欲求の強さや甘えやすさなどの視点から検討を行ってきた(小林・加藤, 2007; Kobayashi & Kato, 2004)。本研究では、そのような甘え対象の中でも、特に「恋人」と「親友」を特定の相手として選択した。その理由は、大学生という時期が、「家族間における『甘え』」を中心とした関係から、より多様な甘え関係として、恋人や親友といった「家族以外との親密な関係における『甘え』」に移行すると考えられるからだ。

具体的な手続は研究1と同じであるが、研究2では、特定の甘え対象を選ばせた上で、その対象への甘え行動の程度を評定するように求めた。

教示: 「人はいろいろな人に様々な形ややり方で甘えます。その中には、いい甘えもあるし、困った甘えもあります。あなたは普段、次のような甘えをどのくらいしていますか。

なお、ここでは『甘える相手』として、以下の人を思い浮かべてください。現在、恋人がいる人はその恋人を、現在、恋人がいない人は、現在最も親しいと思う友人(親友)を思い浮かべて下さい。

それでは、あなたは普段、その相手に対して以下のような甘えをどのくらいしていますか。あてはまるところに をつけてください(「1: 全くしない」~「7: 非常によくする」で評定)。

結果と考察

1. 分散分析結果

恋人群・親友群のそれぞれについて、全体と男女別の平均得点を算出した(Table 3の下部)。それらの平均評定得点について、甘え対象(2)×性(2)×因子(4)の3

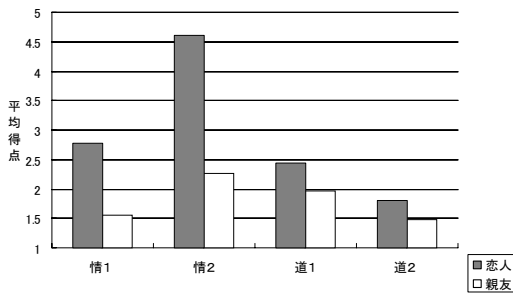


Fig.2 甘え対象による各因子の平均得点 (研究2)

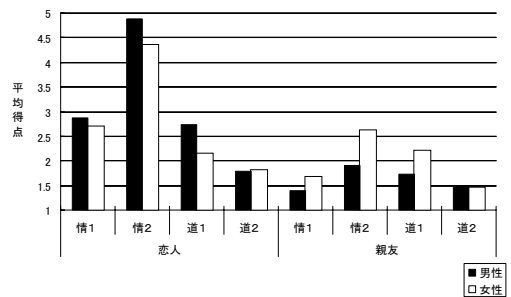


Fig.4 甘え対象と性別による各因子の平均得点差 (研究2)

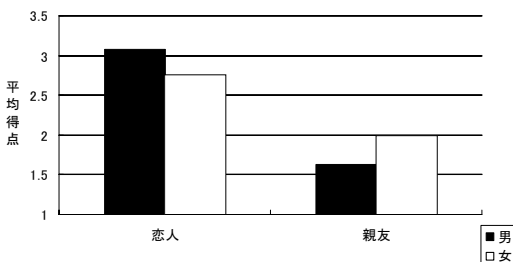


Fig.3 男女による各甘え対象の平均得点 (研究2)

要因の分散分析を行った (甘え対象と性は被験者間要因であり、因子は被験者内要因である)。

その結果、甘え対象および因子の主効果がそれぞれ有意になった ($F_{(2,36,843.43)}=103.53, p<.001$; $F_{(1,843.43)}=56.9, p<.001$)。だが、性の主効果は見られなかった ($F_{(2,36,843.43)}=.11, p=.91$)。有意になった主効果について見てみると、まず、甘え対象の効果では、恋人 ($M=2.91$)の方が親友 ($M=1.81$)よりも高くなることを示していた。また、因子の効果は、次のパターンを示していた (Fig.2 参照)。すなわち、「情2：べたべたと身体的な接触を求める甘え ($M=3.44$)」が最も高く (全て $p<.001$)、次に「情1：子どもっぽく振る舞う甘え ($M=2.16$)」と「道1：代わりにしてもらおう甘え ($M=2.20$)」がその間に来ていた (情1 = 道1)。最後に、「道2：物質的援助を求める甘え ($M=1.64$)」が、他の要因よりも有意に低かった (全て $p<.001$)。

以上の主効果の結果から、大学生は、親友よりも恋人に対して甘え行動をより行っていると考えられる。また、親友や恋人に対してはべたべたと身体的に接触を求めるような甘え行動を最も頻繁に行うが、お金や物をねだるような甘え行動はあまり行わないと言えるだろう。この

結果は、研究1で得られた因子に関する結果のパターンと一致するものであった。

次に、これらの主効果は、1次の交互作用の結果から、条件により異なることが示された。すなわち、1次の交互作用では、甘え対象×因子および甘え対象×性の交互作用が有意となった ($F_{(2,36,843.43)}=38.11, p<.001$; $F_{(1,357)}=5.39, p<.05$)。だが、性×因子の交互作用は有意ではなかった ($F_{(2,36,843.43)}=.17, p=.91$)。

有意になった2つの交互作用について下位検定を行った。まず、甘え対象×因子の交互作用 (Fig.2 参照) について下位検定を行った。恋人への甘え行動では、情2 > 情1 = 道1 > 道2 (情1 - 道1 以外は全て $p<.001$)であった ($F_{(2,26,237.98)}=157.18, p<.001$)。また、親友への甘え行動では、情2 = 道1 > 情1 = 道2 となっていた ($F_{(2,43,618.32)}=98.55, p<.001$; 全て $p<.001$)。一方、因子ごとに甘え対象の単純主効果を検討したところ、「情緒的甘え」の2因子でも「道具的甘え」の2因子でも、恋人 > 親友 (それぞれ、 $p<.001, p<.05$)となっていた。

次に、甘え対象×性の交互作用 (Fig.3 参照) では、男女ともに恋人への甘え行動が親友よりも有意に高かった ($F_{(1,37)}=33.95, p<.001$; $F_{(1,320)}=57.25, p<.001$)。一方、恋人群では甘え行動に性差はなかった ($F_{(1,103)}=1.61, p=.21$)、親友群では女性の方が、男性よりも有意に高かった ($F_{(1,254)}=4.76, p<.05$)。よって、この交互作用は、全般的には恋人への甘え行動の方が親友よりも高いが、男女によって、それぞれの対象への甘え行動に違いがあることによると言える。すなわち、親友への甘え行動では、男性の甘え行動の頻度は女性のそれよりも低い、恋人への甘え行動では同じであることによると考えられる。

最後に、2次の交互作用が有意となっていた ($F_{(2,36,843.43)}=3.75, p<.05$)。この有意な差は、Fig.4 から読み取れるように、情2において性差があることによると考えられる。この差を検証するために下位検定を行った⁸⁾。

その結果、次のような2つの特徴があることが示され

⁸⁾ 2次の交互作用は、各要因のレベルごとに、単純交互作用を検定し、有意になったものについてのみ、更に単純単純主効果を検定した。本稿では、この2次の交互作用を引き起こしていると考えられる効果の結果のみを報告する。

た。男女で、甘え対象×因子の交互作用の表れ方が異なっていた。情2の平均得点において、男性の得点が女性よりも低くなっていた。以下では、甘え対象×性別×因子の下位検定について、主な結果のみ述べることにする。

甘え対象ごとに、性別×因子の単純交互作用を検討した。恋人群では単純交互作用は有意ではなかったが ($F_{(2,24,230,23)}=1.04, p=.36$)、親友群では単純交互作用が有意となった ($F_{(2,79,76)}=3.67, p<.01$)。有意になった親友群の交互作用を検討したところ、男性では因子間に有意差はなかったが ($F_{(1,65,41,35)}=1.81, p=.18$)、女性では見いだされた ($F_{(2,37,542,63)}=103.59, p<.001$)。この差は、情2 > 道1 > 情2 > 道2 というパターンを示していた (全て $p<.001$)。次に、因子ごとに性差を検討したところ、情2においてのみ、男性の方が女性よりも有意に低くなっていた ($p<.001$)。

以上の結果をまとめると、この2次の交互作用は、有意になった甘え対象×因子の交互作用の効果であり、特に情2で男性が女性に比べて低くなったことに起因している。すなわち、男性では、親友に対する4つの甘え行動間に有意な差がなく、特に「情2：べたべたの情緒的甘え」で、女性よりも有意に得点が低くなっていることに起因していると考えられる。

以上の分散分析の結果をまとめると、以下のことが示唆されるだろう。まず、主効果を検討したところ、因子の主効果は、情2 > 情1 = 道1 > 道2 というパターンを示していた。すなわち、大学生が最も行っているのは、身体的な接触を求める情緒的甘え行動であり、これに対して、最も行っていないのは、物質的援助を求める道具的甘え行動であった。甘え対象の主効果からは、大学生は、親友よりも恋人に対して、4つの甘え行動の全てでより頻繁に甘え行動を行っていた。

次に、1次の交互作用の結果では、性差については、恋人への甘え行動頻度で男女差はないが、親友に対しては女性の方が男性よりも多く甘えていた。甘え対象については、恋人に対する甘え行動では、因子の主効果は上述のパターンで示されていた。しかし、親友に対する甘え行動では違うパターンとなった (情2 = 道1 > 情1 = 道2)。つまり、甘え対象の違いを考慮した場合には、因子の効果の表れ方にも違いが出てくることが示されていた。

最後に、2次の交互作用の結果から、性別の次元を考慮した場合に、因子の主効果のパターンが変わってくることを示されていた。具体的には、男性の親友に対する甘え行動において因子の効果自体がなくなり、これは、特に情2での得点が男性では低くなることに起因していた。

以上のことを言い直すと、次のようになる。大学生は、

「情緒的甘え」でも「道具的甘え」でも、親友より恋人に対してより頻繁に甘えているようである。特に、男性は、いちゃいちゃ・べたべたするような情緒的甘え行動を親友に対しては行わないという特徴を示していた。同性同士での身体的な接触は、若い女性では、日常場面でも比較的目にする事ができるようであるが (例：手を繋いで歩く、など)、若い男性同士でこのような接触をすることは、一般的に女性ほどにはしないだろう。このような点での違いが、親友への甘え方の差として表れたのではないかと考えられる。

総合考察

(1) 情緒的・道具的甘え尺度の作成

本研究の第一の目的は、「甘え」を数量的に測定できる新しい尺度を作成することであった。小林・加藤 (2007) は、「甘えの目的による2種類の甘え」(加藤, 1998) に基づき、道具的・情緒的甘え尺度を探索的に作成した。しかし、この尺度には、項目作成の手続きや項目数、妥当性の検討などにおいて改善すべき点が残されていた。そこで、本研究は、2つの「甘え」に関連する包括的な甘え行動項目を作成した上で、新たに甘え尺度を構成し、その心理測定的特性を確定した。

この甘え尺度の妥当性と信頼性の検討は、以下の手続きにより行われた。まず、一連の因子分析の結果に基づき、最終的な4因子が抽出された。それぞれの因子は、「情緒的甘え」と「道具的甘え」のいずれかに関連する項目であった。つまり、「情緒的甘え」と「道具的甘え」は、理論的な想定どおり、別の因子として捉えることが可能であった (因子的妥当性の確認)。また、各因子は、十分に高い内的整合性を示していた (信頼性の確認)。さらに、これらの4因子と藤原らの甘え表出尺度との間に正の相関関係が示されたことから、基準関連妥当性が確認できた。

以上の結果から、本研究では、一定の妥当性と信頼性を備えた新しい甘え尺度を作成することができたといえよう。この尺度は、「情緒的甘え」と「道具的甘え」に区別して「甘え」を数量的に表現できるという点で、大きな意義を持つものである。例えば、従来よく用いられてきた尺度である甘え表出尺度との相関分析の結果から、この甘え表出尺度は、道具的甘え行動因子とは強く相関しているが、情緒的甘え因子とは中程度の相関にとどまることが示されていた。つまり、これまでの甘え研究は、「道具的甘え」を中心として「甘え」を捉えてきた可能性があると言えよう。本尺度は、これまでの甘え研究では見過ごされがちであった情緒的な側面の「甘え」を測定できるという点で、今後、「甘え」の異なった側面を明らかにしていく上での有効な道具となる可能性がある。

実際、「情緒的甘え」における「身体的な接触を求める甘え」は、これまでの既存の尺度では項目化されていない「甘え」であった。しかし、本研究の結果から、大学生が最も頻繁に行う甘え行動は、まさにこの「身体的にいちやいちゃ・べたべたする甘え」であることが示された。これは、これまでの尺度では明らかにすることのできなかった側面であり、本尺度の有効性を示すものである。

最後に、本研究は、青年期の大学生に限定した調査であるが、「甘え」の発達の変化を捉える上でも、「情緒的・道具的甘え」の視点は重要なものである。例えば、幼児期の子どもでは、情緒的甘え行動を頻繁に行う一方で、物をねだったりする甘え行動も遠慮なく行っているかもしれない。また、青年期の恋人関係と安定した夫婦関係では、家事の分担や家計の負担などにおいて夫婦は互いに「頼み頼まれ」の関係であることが多いため、道具的甘え行動の頻度が高くなる可能性もある。このように、それぞれの発達段階で特徴的な甘え行動のパターンを捉える上でも、情緒的・道具的甘えに区別可能なこの尺度は意義を持つものであるだろう。

(2) 大学生の甘え行動の特徴

道具的・情緒的甘え尺度を用いた2つの研究結果から、大学生の甘え行動について、以下の2つの特徴が示された。

第1に、研究1の結果から、大学生は、情緒的甘え行動を道具的甘え行動よりも頻繁に行っており、更に中でも「身体的に接触を求める情緒的甘え」を最もよく行っていた。その一方で、「金銭的な援助を求める道具的甘え」は最も行われていなかった。一般に、大学生は経済的にまだ自立しておらず、金銭などの物質的な援助を他人に（特に親に対して）求めても、比較的許容される時期であると考えられる。実際に、これまでの甘え研究でも、金銭的な援助を求める状況は、「甘え」の気持ちが生じやすい代表的な状況であるとされてきた（大迫ら、1994；外山ら、1991など）。しかし、本尺度を用いたとき、実際の甘え行動の頻度では、物質的な援助を求める甘え行動はそれほど行われていないという予想に反する結果が得られた。

この原因として、青年期の大学生は、物質的・経済的に周囲に依存していた状態から、徐々に自立を意識し始める心理的離乳の時期にあることが挙げられる。すなわち、大学生は、甘えてお金や物をねだったりすることは、「恥づかしいこと、やってはいけないこと」として捉える傾向があるのではないだろうか。例えば、外山ら（1991）でも、大学生は、中学生や高校生と比較した場合、「甘えることへの抵抗感」をより強く持っていることが示されている（ただし、この場合の甘え対象は両親

に限定したものである）。つまり、大学生が、物質的援助を求める甘え行動の頻度を特に低く評定していたことは、このような青年期特有の自立の意識が影響していた可能性が考えられる。

その一方で、大学生の時期は、一人暮らしの開始やアルバイトなどの社会的活動の増加によって、それまでの家族を中心とした関係から、家族以外との人間関係へ広がりや深まりが見られる時期でもある。そのような大学生の時期において、わざと子どもっぽく振る舞ったり、身体的な接触を求めたりするような甘えを行うことは、「相手との親密な関係を味わう、相手とさらに仲良くなる」といった潤滑油的な機能（Kato, 1995）に徐々に気づき、用い始めたことの現れだと考えられる。すなわち、青年期の大学生では、情緒的甘え行動は、道具的甘え行動よりも、ポジティブなものとして認識され始めているのではないだろうか。情緒的甘え行動の方が、道具的甘え行動よりも高い頻度であったことは、これらのことを反映している可能性があるだろう。

第2に、大学生は、親友よりも恋人に対してより頻繁に甘えていることが示された。特にこれは男性において顕著であり、男性は、親友に対して身体的な接触を求める甘え行動をあまり行わないが、恋人に対しては頻繁に行っていた。このことには、大学生の時期には、異性関係を持つことが以前よりも社会的により許容され、恋人関係が対人関係の中でも特に重要な位置を占めるようになることと関係していると考えられる。例えば、多川（2003）は、大学生への面接調査の結果から、恋愛関係は大学生の対人関係観に影響する重要な関係性であり、恋人に悩みを聞いてもらったり活動を共にしたりすることで精神的安定がもたらされることを示している。そのような大学生の異性関係では、身体的にいちやいちゃ・べたべたする情緒的甘えは、先述したような潤滑油的な機能を持つものとして、特に多く用いられているのではないだろうか。

その一方で、ちょっとした依頼を聞いてもらったりするような道具的甘えは、親友でも比較的高くなっていった。すなわち、大学生は、「甘え」の目的に応じて甘え対象を選択しており、親友は、情緒的甘えよりも道具的甘えの対象になりやすいと考えられる。したがって、大学生は、甘えの目的に応じて、いくつかの甘え対象の選択肢の中から最適な相手を選択していると推測される。このことは、大学生が持つ「甘えネットワーク」（Kobayashi & Kato, 2004）を理解する上で、重要な示唆を与えるものだろう。例えば、Kobayashi & Kato, (2004) は、より複雑で複数の甘え対象から「甘えネットワーク」が成り立っている人や単純で少数の甘え対象しか持たない人がいることを見いだしている。しかし、これに情緒的・道具的甘えの視点を組み合わせただけの場合には、さらに異なる

様相が見られる可能性がある。したがって、今後は、大学生が持つ「甘えネットワーク」を捉える上でも、情緒的・道具的甘えの視点から検討していくことが必要であろう。

(3) 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界と今後の課題として、次の2点が挙げられる。

第1に、本研究では、恋人がいる人はその恋人、現在恋人がいない人は親友への甘え行動頻度について回答者に評定を求めた。したがって、甘え対象による頻度の比較は、実際には、恋人群と親友群による群間差の比較によって行われている。だが、そもそも恋人群と親友群に分ける段階で、それぞれに含まれる人の特性が異なっている可能性がある。特に、本研究での回答者は、大学に入学して3ヶ月程度の大学1年生が大部分を占めていた。そのように新しい環境に入って日が浅い段階でも、すでに恋人がいる人（特に大学生になってから新しく恋人ができた人）は、そうでない人よりも、全般的に対人志向性が高く、対人コミュニケーションを積極的に行いやすい人であるのかもしれない。このことから、恋人群に含まれている人は、実際には、恋人にも親友にも頻繁に甘え行動を行いやすい人である可能性がある。したがって、本研究の結果と、恋人と親友の両方がいる人が繰り返し評定した場合の結果とを、比較検討する必要があるだろう。

第2に、本研究では、研究2で男性の回答者が少なく($n=40$)、特に恋人のいる男性は13名しかいなかった。そのため、研究2の結果を解釈する際には留意する必要があるだろう。本研究の結果の信頼性を高めるためにも、より多くの男性からの回答を追加し、各群に含まれる人数をできるだけ同数にした上で、改めて検討を行うことが求められる。

引用文献

- 土居健郎 (1971). 甘えの構造. 弘文堂.
- 土居健郎 (1988). 「甘え」理論再考 - 竹友安彦氏の批判に答える -. 思想, 771, 99-118.
- 藤原武弘・黒川正流 (1981). 対人関係における甘えについての実証的研究. 実験社会心理学研究, 21, (1), 53-62.
- Kato, K. (1995). *Empirical studies of amae interactions in Japanese and American adults: Constructing relational models and testing the hypothesis of universality*. Unpublished dissertation, University of Michigan (UMI Microform 9542870, Ann Arbor, MI: UMI Company).
- 加藤和生 (1998). 目的の甘えと道具的 (あるいは依存) 的甘えの区別. 九州大学大学院心理学講座. 未発表論文.
- Kato, K. (2005). *Functions and structure of amae: personality-social, cognitive, and cultural psychological approaches*. Fukuoka: Kyushu University Press.
- 木村敏 (1972). 人と人との間 - 精神病理学的日本論 -. 弘文堂.
- Kobayashi, M. & Kato, K. (2004). *Individual differences in "amae network (Japanese interdependence)"*. Poster presented at the 28th International Congress of Psychology, August 8-13, Beijing, China.
- 小林美緒・加藤和生 (2006). 大学生はどのくらい他者に甘えているのだろうか? - 実態調査と「甘えタイプ」による個人差の検討 -. 日本心理学会第70回大会 (福岡). 大会発表論文集, 272.
- 小林美緒・加藤和生 (2007). 「情緒的甘え」と「道具的甘え」との区別の実証的意義の検討: 青年期の甘え欲求の違いと甘えタイプからの分析を通して. 九州大学心理学研究, 8, 41-52.
- Kumagai, H. A. & Kumagai, A. K. (1986). The hidden 'I' in *Amae*: 'passive love' and Japanese social perception. *Ethos*, 14(3), 305-320.
- 大迫弘江・高橋超 (1994). 対人的葛藤事態における対人感情及び葛藤処理方略に及ぼす「甘え」の影響. 実験社会心理学研究, 34, 44-57.
- 多川則子 (2003). 恋愛関係が青年に及ぼす影響についての探索的研究: 対人関係観に着目して. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 心理発達科学, 50, 251-267.
- 竹友安彦 (1988). メタ言語としての「甘え」. 思想, 758, 122-155.
- 外山嘉奈子・高木秀明 (1991). 青年期の「甘え」の心理に関する一研究 - 「困った」場面の分析を通して -. 横浜国立大学教育学部紀要, 31, 79-103.